

## 父の手と酢めしの味

柏 美香（北海道小樽市 四十九歳）

幼稚園、小学校、中学校……と我が家のお弁当は、病気がちの母の代わりに、当時寿司屋を営んでいた父が作ってくれたものでした。

それも、おにぎりの時には、前日の商売の残りのシヤリ（酢めし）を、父の大きな手で握った、ダイナマイトの様な、真っ黒い海苔で覆われた、大きな大きなものでした。

「働かざるもの食うべからず」が口ぐせの辛抱な父でしたから、中身の具は当然何も無く、酢巻きならぬ、酢にぎりでした。

夏の暖かい時期の、遠足などでは、傷みづらく理に適ったものだったと思います。

また、お弁当の時には、前日や当日の仕出し料理の残りを詰めあわせた豪華なものでした。煮しめ、だし巻玉子、小鯛の姿焼き、蟹甲羅揚げ、海老フライ……さらに、法事の料理の時には、黒飯までは付かないに

しろ、なんと羊かんが入っていた事もありました。

恥かしくて、蓋を開ける事が出来ずに、手を付けずに、そのまま持って帰って来た事もありました。

そのまた何も無い時のお弁当は、極端に寂しいもので、白飯に茶色い「ほっけ」の焼いた物だけ……または、白飯に茶色い「かすべ」の煮付けだけ……蓋を開けると、あたりに「ぶーん」と生臭さが漂よって……父には悪いと思いつつも、残して帰ると叱られるので、捨てて帰って来た事もありました。

今思えば、なんと罰当りな事をしたものだと思いをしております。

実は私、幼い頃に栄養失調で、二度も病院に運ばれるという経験があります。

その頃、父の商売が多忙を極めて、子供達の食事の用意にまで、手が回らなかつたのでしよう。「お腹が減った」などと言おうものなら、「水を飲めば治る」

などと一喝！ シヤリ切りのへらで、頭を叩かれたものです。

唯一のおやつは、鍋の焦げ飯に塩をふったもので、いつも空腹感で一杯だった思い出があります。

そんなこんなで、近所の人達からは、「〇〇寿司の娘が、栄養失調で、また病院に運ばれたってよ。」などと、噂を立てられた事もありました。

さすがの父も、恥かしかつた事でしょう。

今の時代であれば、学校で虐めに遭っていたかも知れませんがね。

子供の頃には、とても嫌な思い出でしたが、今では寿司屋さんの前を通ると、芳しい酢の香りに立ち止まり、父の握ってくれた、あの大きな黒いおにぎりを思い出し、鼻の奥が「つーん」として、涙ぐむ事があります。何度か再現を試みてみましたが、同じ味にはなるはずも無く、口の中で酢っぱく脆く崩れて、空しさと共に噛みしめたものです。

その父も、三年前の元旦に亡くなりました。晩年には、認知症を患って、この話しても何も憶えてないらしく、まともに「ありがとう」と言えなかつた事が悔やまれます。

あの、ごつごつと大きな温かつた手も、私の手の中で、ひんやりと小さく納まってしまつて……ただ「ありがとう」と心の中で一言……お別れしました。

